

盛岡城小・嘸

#『雑書』漢字クイズ! <第13回>

Vol.13でもお届けした『雑書』漢字クイズですが、今回も『雑書』に登場する漢字の解説に挑みながら、そこに見え隠れする盛岡城や盛岡藩の営みを感じていただければと思います。

解説のヒントに、『雑書』に漢字が出てくる場面のエピソードも紹介しますので、そこからわかる往時の様子や今との違いなども楽しみつつ、答えを導き出してみてください。

Question

- ① 鰯 ② 薇 ③ 粽
④ 霰 ⑤ 天鷲絨

※正解は最後!

- ①…松平備前守から結納祝としていただくなど、よく祝いの品の一つとして記されます。今ではみんなのお酒のおつまみです。
②…毎年歳暮として、花巻御郡代から干したものが献上されていました。山で採れる食材です。
③…端午の節句に食べるもので、盛岡城では毎年5月5日に役人たちにふるまわれていました。
④…気候的には寒い時期の風物詩と考えられますが、享保元(1716)年には9月27日に降っているようです。ちなみにこの頃は、9月や10月に“初雪”の記述がよく確認できます。
⑤…大阪の豪商である天王寺屋弥右衛門が献上品として持参したもの。今では目にする機会は少ないかも?

※正解※

- ① するめ ② ぜんまい ③ ちまき
④ あられ ⑤ びろーど

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。
盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、盛岡城復元調査推進室(019-613-7956)まで、情報提供をお願いします。



盛岡城日記

雑書

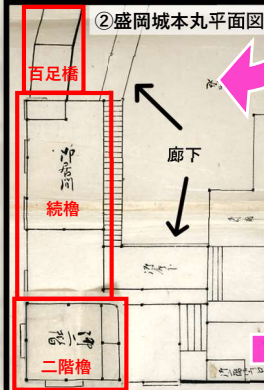
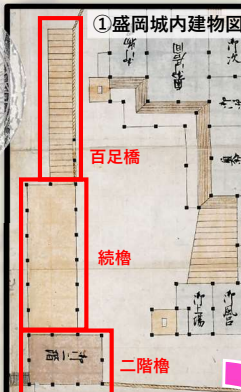
Vol.19 2024年12月

現在、復元の対象として検討が進められている二階櫓は、天守とともに盛岡城を象徴する建物であり、焼失や倒壊の度に再建された歴史性を持つ重要な建物です。今回は、時の流れとともに移り変わる二階櫓の様相について、もりおか歴史文化館収蔵の絵図をもとに、その変遷を追っていきます。



これは、江戸時代中期のものと考えられている絵図です。二階櫓部分には「御二階」と表記されており、東西3間×南北2間の大きさで、北側には続櫓(つぎやぐら)と百足橋(ももあしはし)が接続する形となっています。それ以外、二階櫓等の周囲に部屋や廊下の配備はなく、独立した建物となっていることがわかります。

「櫓」は本来、戦に備える物資の貯蔵庫兼防衛拠点としての機能を持つ建物で、この時期の盛岡城の二階櫓も、内部は間仕切りのない簡素な構造でありました。ここからは、櫓本来の役割を担う二階櫓の姿が思い描かれます。



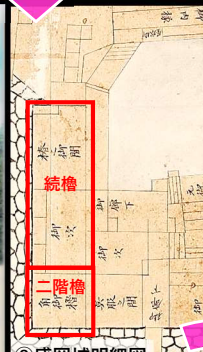
これは、江戸時代後期の盛岡城の絵図に分類されており、二階櫓部分には、①の図面と同様に「御二階」と表記されています。大きさは2間四方で、二階の東側にある押入が外側に張り出していました。北側の続櫓の内部には、室名のない2間四方の部屋と「御居間」があり、北側には百足橋が続きます。

二階櫓の建物は、東側と北東側が廊下等で本丸御殿の建物と接続する造りとなっており、その機能を居住空間的な役割を持つ場所へと変えていく過渡期であったとも捉えられます。



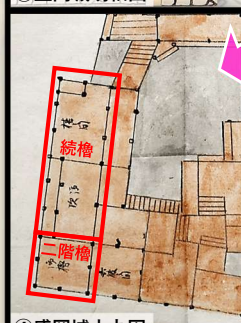
【本丸二階櫓等イメージパース】

これも②と同じ江戸時代後期の絵図と思われますが、二階櫓の表記は「角御櫓」となっています。柱間の表示はないものの、大きさは2間四方で、続櫓は「御次」と「櫓之御間」の2つの部屋を構えます。百足橋は西側に拡大した本丸御殿に取り込まれたため、ここには描かれませんが、その様子は、同じ時期の他の絵図から確認できます。



③盛岡城明細図

一方、本丸御殿との一体的な造りに大きな変化はなく、名称なども含め、二階櫓の建物にもほとんど違いは見受けられないことから、その使われ方は、③の時期から踏襲されたものであったと推測されます。



④盛岡城本丸図

この盛岡城の絵図は江戸時代末期のものと考えられています。二階櫓部分には「御櫓」と記されており、大きさは②③と変わらず2間四方です。続櫓の間取りや部屋の大きさも③とほぼ同様となっていますが、この絵図では「櫓之間」の北部に建物も百足橋も存在せず、その点が、これまでの図面と大きく異なります。

この盛岡城の絵図は江戸時代末期のものと考えられています。二階櫓部分には「御櫓」と記されており、大きさは②③と変わらず2間四方です。続櫓の間取りや部屋の大きさも③とほぼ同様となっていますが、この絵図では「櫓之間」の北部に建物も百足橋も存在せず、その点が、これまでの図面と大きく異なります。